

要 旨

本論文では既存の理論枠組みでは捉えきれない、子どものいる女性＝「ママ」たちの姿を明らかにすることを目的としている。

2000年代後半から2010年代にかけ読者層を「ママ」に特化した雑誌が相次いで創刊され、雑誌の分類に「ママ雑誌」と明記できる状況が生みだされている。それだけでなく、若者文化にしばしば登場する「系」による分化が「ママ雑誌」にも浸透し始め、ギャル系やセラブ系といったカテゴリーに対応したママ雑誌が登場しているのである。

これらの新たなママ雑誌の登場は、これまで捉えられていた母親像を変容させている。

天童・高橋（2009）は雑誌メディアが表象する母親像を、「育児だけではない私」、「子どもがいて（こそ）輝く私」という言葉で表現した。だが、近年出版されているママ雑誌は、育児がおしゃれや女磨きと同じレベルで語られ、「ママを楽しむ」ことを推奨する。「育児だけではない私」から「子どもがいても自分が主役」へと新たなママ像を提示する。

また「かわいい」という価値観の受容と広がり、「母親」としての輝きではなく、「自己」の輝きに目を向けた母親像へと変容させているのではないかと考える。

そうした視点から、近年発売されているママ雑誌の内容を分析すると、ママと子どもを総体的に捉えたファッション性であることがわかる。加えて、子ども用品やおもちゃなどにもファッション性が追求され、「モノ」で「ママを楽しむ」ことを推奨する。

また“リアル”という言葉が頻出し、「子ども自分も大事」という「ママ」のスタイルを実現する how to 本の役割を担っていることがわかる。

さらに特徴的なのは、「見る」視点だけでなく、「見せる」視点がママ雑誌を含むメディアの表象するママ像にとって重要な要素となっていることである。「ママ」たちは自らの「ファッション」だけではなく、競って「献身さ」を「見せる」のである。この「見せる」戦略の代表格が「キャラ弁」である。キャラ弁は、時としてママ個人の力量の水準をはかる道具として使われており、子どもを育てる「力」というよりもママである「わたし」を見せる「力」が問われるようになってきているのではないかと考える。

こうした変化が際立つのがギャルママ系雑誌『アイラブママ』である。『アイラブママ』は、他のママ雑誌に比べ、キャラ弁やデコ食を扱った記事が多い。先に述べたように、「キャラ弁」は献身さを「見せる」ための道具になり、道具を使う「わたし」を強調する。「見せる＝魅せる快樂に捕らわれ」（米澤（2008））た「わたし」こそ、「わたし」に取り組む「ママ」の姿なのである。そんなママたちは他方で、今この瞬間を生きる「刹那的な」姿をも見せている。子育てに関しては「友達親子」を標榜するが、一見フラットなその関係はむしろ、親と子どもの境界を設けず、子どもの領域に踏み込む親の姿として多く映し出されている。これは自覚しないまま子どもを自分の所有物として扱い、その所有物に依存してしまう傾向を示しているのではないだろうか。

一方、「働くママ」の雑誌『ビズママ』は、子育て環境の情報収集や社会資源の活用方法、人生設計などの記事が多く、「戦略的人生」を歩もうとするママの姿がある。大人と子どもとの線をはっきりと引き、「精神的自立」「生活自立」「経済的自立」に重きを置くスタンスで、つまり子どもを別人格として捉える親子関係を語る。

だが、“美”・“オシャレ”か“仕事”かの違いはあるものの、「わたし」に取り組んでいる点では共通している。「子どものため」との正当性を示しつつ、自分磨きや「わたし」が楽しむ時間確保を推奨する。時に子どもはママの「援軍」として、夫は育児や家事に協力的に「育てる」対象として位置づけられる。家事や育児の「手抜き」に関する記事においては「上手な手抜き」の半面で仕事に打ち込む「わたし」を見せるのである。

「ママ雑誌」はこのようにして、“美”“オシャレ”“仕事”による自分磨きの方法や「到達目標とする完成形」を示しつつ、「わたし」に取り組むことを強調するのである。

こうした「ママ雑誌」に描かれている「ママ」の実像に迫るため、ギャルママとワーキングマザーという「ママ」たち、職業を通して「ママ」たちを「支える立場」で関わるネイリストと保育士の4名を選出し、半構造化面接の手法でインタビュー調査を行い、その語りを通して浮かび上がるママたちの実情を明らかにしている。

その結果、ギャルママとワーキングマザーでは、「生き方」や「子育てのスタンス」に違いが見られ、これはママ雑誌から得られた知見と重なっている。

次に、ネイリストのインタビュー調査から、ママがキレイでいることが一般的になったという時期と、「ママ雑誌」の相次ぐ創刊時期とが重なり、従来のママ像から新たなママ像に変容したと考えられる時期は「つい最近のこと」だということが裏付けられた。また、ママたちの“美”は「自分のため」の“美”であり、「母親」としての輝きではなく、「自己」の輝きに目を向けた母親像へと変容していることへの裏付けになると考える。また、ママたちの間で「系」による分化が浸透していることを裏付ける語りもみられた。

さらに“美”を追い求めているママたちは、カリスマ・ママなどの“美”の教祖に従順であり、“美”という趣味を謳歌していることがわかる。そのような“美”に熱心なママたちは、自分が“美”に取り組んでいる分、子どもにも何かしなければいけないと習い事をさせている。ただし、それは自分の時間をつくるためでもあると語る。このことは、ワーキングママ雑誌が「子どものため」という正当性を示しつつ、自分磨きや「わたし」が楽しむ時間確保に誌面を割いていたことと重なり、ママ雑誌で明らかにしたママ像が裏付けられていることを意味するものだと考える。